

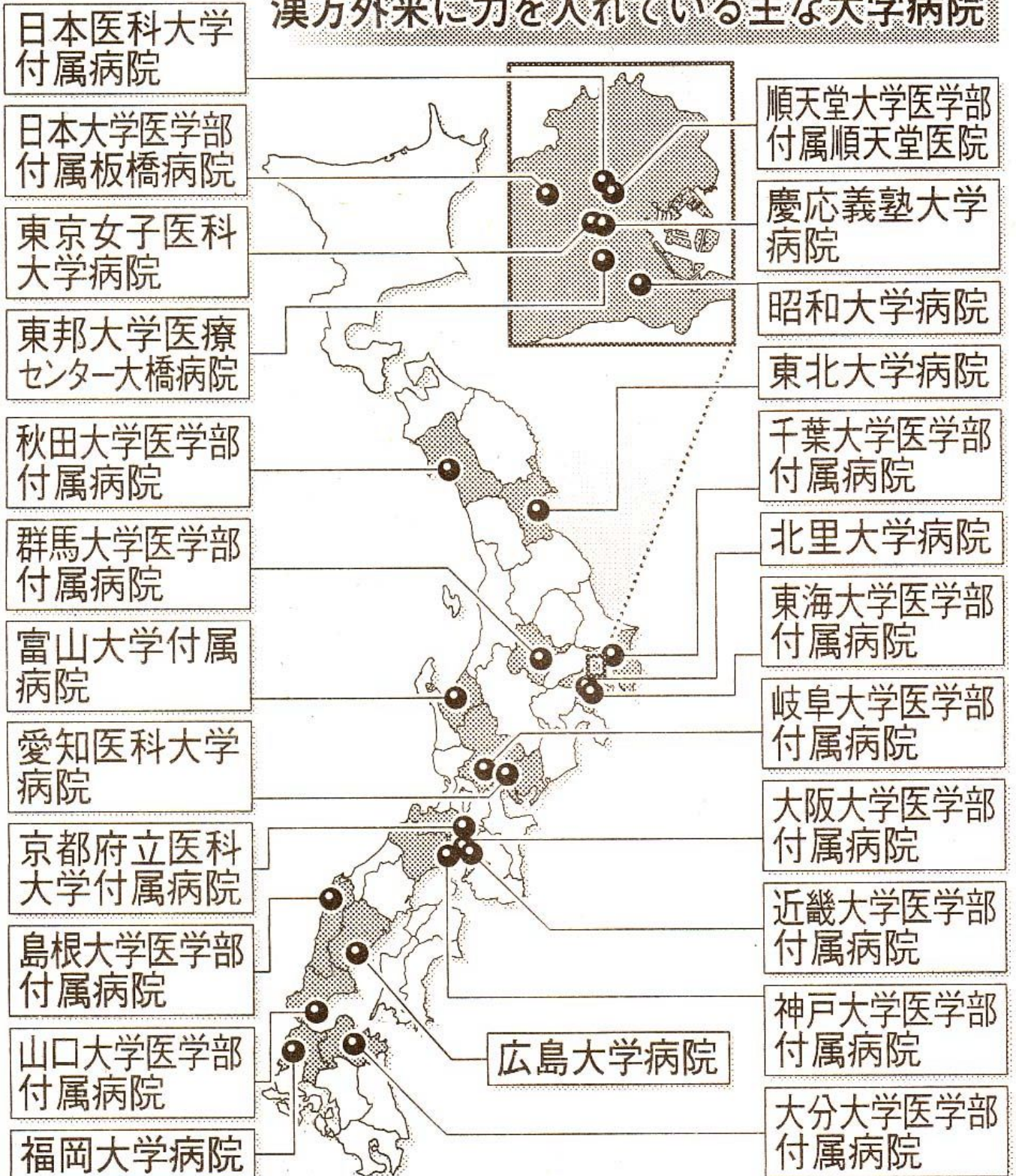
中 國 新 聞

①

大学病院 漢方の波

⌒

漢方外来に力を入れている主な大学病院



高齢者に使うケース増加

漢方薬は漢方専門医だけで使われているわけではない。一般の治療で使われており、医師全体では70%以上が使用しているという。

使用頻度の高いのは産婦人科や泌尿器科だ。心療内科や消化器科、内科など内科系のほとんどの診療科で漢方薬の占める比重が高くなっている。

特に最近注目されているのが高齢者に対する漢方薬による治療。高齢者は

副作用のリスク小さく

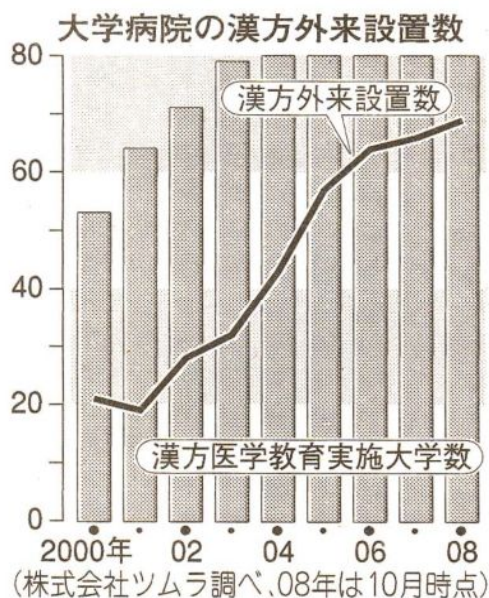
複数の病気にかかっていることが多く、何種類もの西洋薬を使うと、副作用の危険性も高まる。

その点いくつかの生薬から構成させている漢方薬なら、一つの処方で治療も可能で、それだけ副作用のリスクも小さい。しかも体全体のバランスを整えるなど効果が期待できるため、漢方薬を高齢者に使うケースが増えている。

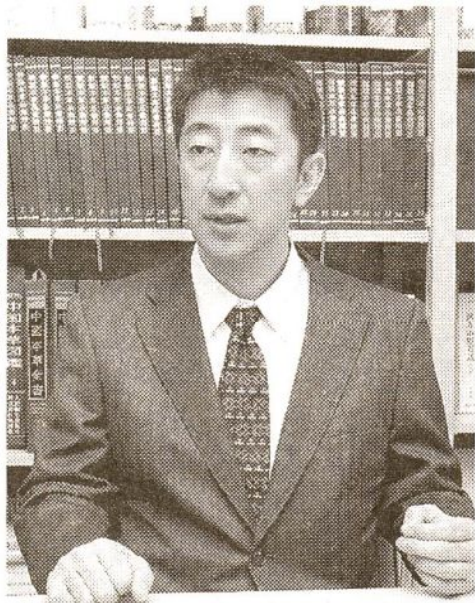
④

漢方医学の手法を採用した「漢方外来」を診療科に取り入れる大学病院が増えている。全国にある医学系大学病院のうち69病院が漢方外来を設置しているという。大学病院のざっと9割近くが何らかの形で漢方外来を設置し、日々の診療を続けている。患者に優しいというイメージがある漢方医学。一方、西洋医学だけでは対処できない病気もある。大学病院に漢方外来が設置される意味は大きい。漢方医学の研究や普及が一段と進むからだ。

全国の9割 外来設置



「漢方医学の流れが変わってきた」と
説明する渡辺センター長



全医学部で教育実施 専

大学病院で漢方外来が増えることを示すデータがある。大手漢方薬メーカーのツムラによると、漢方外来は二〇〇〇年には、二十一だったが、〇三年から増え始め、〇八年末には独立した漢方外来が二十三、診療科の中に漢方外来があるのは四十六に増え、六十九の大学病院が何らかの形で漢方外来を設置。十年間足らずで実に三倍以上の伸びを示した。

増加には訳がある。〇一年の三月に文部科学省の医学教育モデル・コア・カリキュラムに漢方医学が盛り込まれたことがきっかけだ。その結果、〇四年にすべての大学医学部、医科大で医学教育に取り入れられた。

「今までは主として診療所の医師たちによつて漢方医学が支えられてきたが、大

学で市民権を得たことで、漢方医学の流れが変わつてきた」

こう説明する慶応大医学部漢方医学センターの渡辺賢治センター長（准教授）によると、大学病院の漢方外来設置は大きな意味を持つ。

は一部の専門医に限られた漢方医学を身近な医療にする努力だ。西洋医学は内科、外科、呼吸器科などの診療科がある通り、いわば臓器別に診断する。診断基準もはっきりしている。

これに対して漢方医学は、

門化した医療補完

西洋医学だけでは十分に対処できなかったがんや膠原病などの難治性の疾患も治療の可能性を探る試みができるようになってきたのだ。

渡辺准教授のグループは、神経難病の多発性硬化症や筋萎縮性側索硬化症などの治療に、漢方薬が有効かどうかの研究を精力的に進めている。

もう一つ忘れてならないの

身体全体を一つのものとしてとらえる独特の診断法をとる。患者の体の状態を把握するのに「証」という考え方をする。漢方医学を専門としな

い医師には、この証が分かりにくかった。

渡辺准教授らは、厚生労働省の科学研究費を得て、診断法を分かりやすく統一した「漢方の証コード」を二年がかりでまとめて、この三月に

出版にこぎ着けた。

慶応大病院の漢方クリニックでは毎月千百人から千二百人の患者が受診している。

外来を訪れると、紙の問診表でなく、渡辺准教授らが厚生労働省の科研費を使って開発した独自の漢方問診システムが設置してある。

診察のたびに症状の程度を入力することで、治療によってどのように変化してきたかすぐに分かる仕組み。検査による評価だけでなく患者の訴えを重視して治療に役立てようという狙いだ。

「体全体を治療する全人医療を目指しているのが漢方医学。漢方医学には専門化した現在の医療を補完する意味合いがある。このシステムによって臨床的な新しい事実を見つけることができれば」と渡辺准教授は期待している。

6

広島大病院の漢方外来について説明する田妻教授



広島大病院でも処方

広島大病院（広島市南区）

処方している。

は二年前、総合診療科に漢方外来を開設した。診療日は毎週火曜日で、十五―十七人が受診している。多い症状は更年期障害、冷え、めまい、軽度のうつ、じんましんなど。医師は患者の話をしっかりと聞き、体格や性格などの情報や臨床経験から総合的に判断、対症療法として漢方薬を

病院は最先端医療の提供を使命としており、漢方医療は病名や苦痛の原因がはっきりしない患者の苦痛を緩和する「選択肢の一つ」だ。漢方外来を受診しているのは、多くは院外からの患者で、昨春秋にテレビで紹介されたこともあって急増した。臨床現場では、かつてと比

西洋医学と融合し効果 苦痛を緩和する「選択肢」

べて西洋医学と東洋医学の間の垣根が低くなっている。腸閉塞の手術後に漢方薬を新薬と同じように使っているのもその一例だ。漢方は衝撃的な偶発症がないため、「いい薬はどんどん使う」というのが漢方外来の基本姿勢。かつての漢方医療のイメージからは隔世の感があり、驚く患者も多いという。

総合診療科では、田妻進教授を中心に院内外の受診科が横断的に参加するプライマリケア（初期診療）セミナーを毎月開催し、患者について漢方処方を含むさまざまな情報を交換している。田妻教授は「漢方外来には漢方専門医を配置することにも、他のスタッフと漢方や患者の情報を共有することで治療成績を向上させている」と、西洋医学と東洋医学の「融合外来」であることを説明する。

今、漢方医学の研究がものすごいスピードで変容している。最先端の研究の場で漢方医学の効果



順天堂大医学部
小林弘幸教授

とによって、大学の医師も漢方医学に手を出すようになり、有名誌にも論文が掲載されるようになってきた」と漢方医学に取り組む医師が増えている実情を説明する。

小林教授らは、昨年二月から、毎月一回集まり、

だけでは患者の満足度を満たすという意味で限界があることが分かってきた。西洋医学と漢方医学の連携によって臨床成績、患者満足度のアップが可能になる」と小林教授は解説する。

順天堂大では漢方外来

普及へ検証作業が進む

を検証する作業が進んでおり、漢方のEBM（根拠に基づいた医療）の確立の動きも盛んだ。

順天堂大医学部の漢方医学先端臨床センター長を務める小林弘幸教授は「主に病院や開業医で漢方薬が使われてきたが、EBMが確立してきたこ

漢方医学の勉強会を開いている。毎回、五十人近くの医師らが参加、耳鼻咽喉科や呼吸器内科などの診療科からそれぞれテーマを持ち寄り、漢方治療に対する取り組みなどを紹介し合っている。

「西洋医学による治療

を総合診療科だけでなく小児外科や耳鼻咽喉科、呼吸器内科、産婦人科など九つの診療科に設けて、患者の希望に沿った治療をする独特のシステムを採用。診療科別に漢方外来が設置されているケースは極めて

同大の漢方外来の特徴は、各診療科で最新の診療機器を使って、病名の診断をつけて、その上で治療を開始する点。まず西洋医学で治療を受けてもらい、効果がみられない場合や患者本人が希望する場合に漢方外来を訪れてもらうという。

「漢方医学による問診や触診だけではがんなどを見落としてしまうこともあり、訴訟問題になりかねない。漢方医学で治療する際も病名をきちっと診断することが大切。患者にいい医療を提供するためには西洋医学と漢方医学のコラボレーション以外にない」と小林教授は話している。